

# 何が個体化されるのか？

——二人のスコラ学者による個体化論とその存在論的前提——

石田 隆 太

## 一 はじめに

個体化の原理 (principium individuationis) を西洋中世に遡って考えようとする場合、スコラ学者たちによる様々な議論に出会うことになる。トマス・アクィナスの『神学大全』で最初に個体化の原理という言葉に出会うのは第一部第三問題においてであり<sup>1</sup>、主題は神の単純性である。ボナヴェントゥラの『命題集』註解<sup>2</sup>では、第二巻第三区分第一部第二項において個体化の原理という文言が用いられている。そこでは、各々の天使の区別が問題になっている。より正確に言えば、諸天使におけるベルソナの区別がどのようなものであり何に由来するのかが議論されている。

トマスとボナヴェントゥラという一三世紀後半を代表する二人のスコラ学者に焦点を当てると、個体化の原理がアリストテレスに由来する質料形相論を用いて説明されていること

がわかる。先行研究でも指摘されているように、まずトマスは質料的事物にとって個体化の原理は質料であることを明確に提示する<sup>3</sup>。それに対してボナヴェントゥラは、被造物全般にとつての個体化の原理を質料と形相の両方に求めている<sup>4</sup>。ただしトマスの場合、被造物の中でも天使には質料がないとされるので<sup>5</sup>、天使にとつての個体化の原理は質料ではなくて形相であることになる<sup>6</sup>。対するボナヴェントゥラの場合、天使を含めたすべての被造物が質料と形相を持つので<sup>7</sup>、トマスのように天使と質料的事物とに異なる仕方では個体化の原理を指定する必要がない。すなわち、トマスの場合には質料的事物と非質料的事物とで異なる個体化の原理を指定することになるのに対して、ボナヴェントゥラの場合、少なくとも被造物に関しては個体化の原理を一律に指定することができる。しかしこのような整理をただ図式的に提示するだけでは、トマスとボナヴェントゥラが個体化について具体的にどのようなことを考えていたのかはあまり見えてこない。この点を見

極めるために、諸天使がどのように區別されるのかという議論領域に主として焦点を当てながら、トマスとボナヴェントゥラが個体化ということそのものをどのように理解しているのかを本論では辿っていくことにする。以下で主題的に論じたいのは、個体化の原理に関する両者の見解が異なることの背景にある存在論的前提の違いである。

天使の區別に関する議論に焦点が当てられる理由は二つある。第一に、トマスもボナヴェントゥラも個体化に関する独立の体系的な論述を残しているわけではないという事情がある<sup>⑧</sup>。それゆえ、特定の問題に関連して個体化ということが語られている場面を活用する必要がある。しかしより重要な理由としては第二に、天使という事物のあり方に対する捉え方の相違がトマスとボナヴェントゥラの間では顕著であるため、比較の題材としても天使を取りあげるのは有益だということがある。天使において質料性を認めるか否かという点において両者に違いがあることは前述の通りである。それに加えて、まずトマスの場合、天使が質料を持たない結果として、各々の天使は形相だけで區別されることになる。種の担い手である形相だけによって區別される結果として、天使は存在している数だけ種があることになる<sup>⑨</sup>。それに対してボナヴェントゥラの場合、一つの種の下に多数の天使が存在するという図式が採用されている。言い換えるなら、トマスにおいて天使

は種別化されたものとして個体化されているのに対して、ボナヴェントゥラにおいて天使は数的に多数化されたものとしてのみ個体化されている。

天使の個体化という観点でトマスとボナヴェントゥラの比較が主題化されている先行研究としては、ジョルジオ・ピーニの研究<sup>⑩</sup>と坂口ふみの研究<sup>⑪</sup>を挙げることができる。ピーニによればトマスの思想は、各々の天使を質料から分離された純粹な形相として捉えることで、それ自体で個体化されている天使を個的な本質の体現者として見なししている点で革新的だとされる。なぜなら、トマス説を採用しなかったボナヴェントゥラ、ガンのヘンリクス、ドゥンス・スコトゥスは本質の共通性をあくまで護持するからである。

坂口の主張は次の通りである。天使にのみ複数の種を指定するトマスの思想は天使を人間よりもはるかに優位のものとして見なししている。それに対してボナヴェントゥラの思想は、天使も他の被造物と同様に一つの種に複数の個体が属していると捉え、さらにこの世界の中心に人間を位置づけることで、天使に対する人間の何らかの優位性を強調している。

ピーニの研究はむしろ本質という概念をめぐる考察であるし、坂口の研究はトマスとボナヴェントゥラが前提している世界観と言うべきものを描き出すことが主眼になっている。ピーニおよび坂口の主張それ自体に異論を唱えるつもりはな

いが、両者の研究においては個体化ということそのものに対する分析がそれほど主眼になっていない。それに対して本論は、トマスとボナヴェントゥラの両者によって語られている個体化ということそのものの分析を主題的に行うことにしたい。なお、トマスとボナヴェントゥラのどちらが理論的に優れているのかという優劣を論じることは本論の意図ではないことを言い添えておく。

## 二 天使におけるペルソナの区別

トマスとボナヴェントゥラの双方にとってそれぞれの思想を比較する最もふさわしい場の一つは、やはり『命題集』註解』であろう。一二世紀のスコラ学者ベトルス・ロンバルドゥスによつて書かれ、一三世紀には既に神学の標準的な教科書であった『命題集』の第二巻第三区分では、天使の属性として四つのものが取りあげられている。すなわち、①単純な本質、②ペルソナの区別 (discratio)、③知解、記憶、意志という理性的な側面、④自由裁量である。これらの属性からも窺えるように、スコラ学者たちは天使を基本的に知性的存在者として捉えていた。この四つの中で本論と特に関係があるのは②である。天使に対してペルソナという概念が適用されていることは異様に見えるかもしれないが、これは既に

ペルソナ概念が単に神のペルソナにだけ適用されるものであるわけではなかったことを意味する。ロンバルドゥスの同時代人であるサン・ヴィクトルのリカルドゥスにおいても、神、天使、人間のそれぞれに対して適用されるペルソナ概念をどのように区別して考えるべきかが主題的に問題化されていたことをここでは指摘するにとどめておこう。

トマスは、『命題集』註解』において天使にペルソナがあるか否かを論じる箇所で、ボエティウスに由来する「理性的本性の個の実体」というペルソナの定義を主に念頭に置いた上で、天使においてペルソナが認められることを三つの観点から説明する。すなわち、自存すること（これは「実体」に対応している）、理性があること（これは「理性的本性の」に対応している）、個体であること（これは「個的」に対応している）という三つの観点から議論を進めている。まず自存に関しては、人間が質料と形相という部分から複合されて始めて自存するのに対して、トマスにとつて非質料的事物である天使は自らの単純な本性、すなわち形相において自存する。次に理性があることに關しては、人間が感覚から像を受け取ることに基ついて漸進的に推論を行うのに対して、天使はあくまで純粹に知性的な光を分有するだけであり、漸進的な過程を経ずらば神のごとく知解する。最後に個体であること、すなわち共通化不可能性 (incommunicabilitas) が

あることに關して論じられる。まず人間の場合、質料に受容されうる自らの本性、すなわち人間の形相が質料を通じて限定される。それに対して天使の場合、何ものにも受容されないということに基づいて自分の形相がそれ自体で限定されている。このことは、それ以上何も付加されえないという否定によつて神の存在が自身に固有なものであることと同様のこととして語られてもいる。<sup>16)</sup>このようにして天使にとつては、何か自分とは別のものによつて限定されることがないという否定性が共通化不可能であることの根拠になつてゐる。

天使のペルソナそのものに関してトマスの取り扱いが以上のように簡潔なものであるのに対して、『命題集』の同じ箇所に対するボナヴェントウラの取り扱いは段階的でより詳細である。第一に、諸天使は種としては一つだがペルソナにおいては区別されることが論じられる。その理由としては、聖書で伝えられてゐる諸天使の職務が共通のものであること、神において一つの本質に対して三つのペルソナが区別されるという構図と同様であるべきだということが主として考慮されてゐる。<sup>17)</sup>

次に、第二および第三の点を論じる中で個体化ということが頻繁に引き合ひに出されることになる。第二には、各々の天使にペルソナが固有のものとしてあることが附帯的なことであるのかそれとも実体的なことであるのかが論じられる。

ペルソナの区別が主要には実体的なものであることを示すために、まずはその前提となる個体化がどのように見出されるかが説明される。その部分だけを抽出すると次の通りである。ペルソナの区別の前提である「個別的区別」(discretio individualis)は個体化と区別の二つを意味している。まず個体化は、事物の諸原理(すなわち、後に明示されるように質料と形相のこと)の不分割(indiviso)および固有化(appropriatio)に基づく。実際に事物の諸原理そのものは、それらが結合されている限りで、自ら相互を固有化して個体を形成している。このような個体化に随伴して他のものから区別ないし区別されてゐることが生じることにより、個体となつた実体に数が附帯的なものとして随伴する。それゆえ、個別的区別は、個体化という点では実体的な側面に関係し、区別という点では附帯的な側面に関係する。<sup>18)</sup>

第三の点、すなわち、諸天使においてペルソナが固有のものとしてあるということは質料に由来するのかそれとも形相に由来するのかに關しては、まず個体化が質料と形相の両原理に基づくものであることが示される。その上で、ペルソナの区別も同様であることを示していく。<sup>19)</sup>ここでは個体化に關する重要な文章がいくつか出現する。

個体化は形相との質料の現実的な結合——その結合に基づいて一方は他方を自分にとつて固有化する——から出来る。それは次のことから明らかな通りである。以前には一つであった蠟において多数の印影の刻印ないし押印が生じる場合、諸々の印影は蠟なしには複数化されえないし、また、蠟において相異なる印影が生じるゆえにのみ蠟は数えられる<sup>(20)</sup>。

後半では蠟が質料の例として、印影が形相の例として用いられている。例にもある通り、形相は質料があつて複数化されるのであり、逆にまた質料も、形相が相異なるものとして自らの内に生じる限りでのみ複数化される。このような複数化としての個体化は形相と質料の現実的な結合に基づいている。

上記引用文の直後にはさらに重要な箇所が現れる。

それでも、個体化が主要には何に由来するのかということとあなたが問おうとするなら、次のことが言われるべきである。個体とはこの何か (hoc aliquid) である。これ (hoc) であるということとを個体はより主要には質料から保持しており、その質料を根拠 (ratio) にして形相は場所と時間において位置を持つ。何か (aliquid) で

あるということとを個体は形相から保持する。すなわち、個体は存在 (esse) を持ち、現存 (existere) も持つ。現存を質料は形相に与えるが、存在の現実態 (actus essendi) を形相は質料に与える。したがって、個体化は諸々の被造物において二つの原理から出来る<sup>(21)</sup>。

この文章においてボナヴェントゥラは、被造物全般における個体化の二元的な原理を明示している<sup>(22)</sup>。なお、骨格となつている質料形相論的な前提は、天使にも質料があることを述べる箇所でも既に示されていた。

形而上学者はあらゆる被造物の本性を考察し、そしてとりわけ自体的に存在する実体の本性を考察する。その実体においては存在の現実態を考察することができ、形相がその現実態を与える。また自体的に現存することの安定性 (stabilitas per se existendi) を考察することができ、形相が寄りかかつている「先の」ものがその安定性を与え供給するのであり、それは質料である<sup>(23)</sup>。

この二つの引用箇所では、まさに形而上学的な観点から、ボナヴェントゥラが普遍的な質料形相論を被造物全般に対して適用している。存在 (esse) と現存 (existere) がそれぞれ

何でありどう違うのかについてはあまり判明に述べられていないが、質料によって現存が与えられた形相は「場所と時間において位置を持つ」という記述から、少なくとも「現存」が時空の上で限定を伴った状態を意味することはわかる。<sup>24</sup> それに対して、「存在」に関しては解釈の余地があるとみられるが、目下のところでは、形相が存在の現実態<sup>25</sup>を与えるということを、単に自然学に留まらない次元で形相が質料に対して現実態として機能しているということだと理解したい。自然学に留まらない次元、つまり生成変化の場面にのみ限定されない次元とは、ボナヴェントゥラが言うように形而上学的な次元である。

ここまで見てきたことに基づくなら、ボナヴェントゥラにおける個体化に関する考えは次のようにまとめられる。個体化は質料と形相という二元的な原理の現実的な結合によって生じる。個体化によって生じた「この何か」である個体は、「これ」である限りでは時空上に限定されているものとして「現存」し、「何か」である限りでは何らかの現実態性が与えられているものとして「存在」する。この場合、形相や質料がそれぞれ個体化されるというよりは、形相と質料がそれぞれお互いを固有化することで個体化が生じ、その結果として複合体としての個体が形成されるという構図が窺える。

### 三 トマスにおける天使の種別化論証

ボナヴェントゥラとは異なり、トマスは天使の数があつた天使の種があると考えられている。この考えは、前節で参照した『命題集』註解<sup>26</sup>でも既に提示されている。しかし本節では、個体化に関するトマスの考えを分析するという目的のために、叙述が最も秩序立っている『定期討論集』靈的造物物について<sup>27</sup>第八項を参照することにした。

トマスは、天使相互の異なりが種的なものであるのか否かを三つの論拠に基づいて論証する。第一には天使の実体のあり方、具体的には天使の非物体性と非質料性が論拠とされる。第二には宇宙の完全性が論拠とされる。ここでは宇宙の完全性をより多く分有するべきものとして天使が位置づけられており、種としての天使の数が多ければ多いほど宇宙はより完全なものとされる。第三には天使の本性の完全性が論拠とされる。トマスによれば、一つの種に一つの個体しかない太陽などの不可滅な天体は、一個体だけで自らの種の永續性を保存することができるので固有の種に属することを何も欠いていない。さらに天体よりも上位にある天使に至っては、質料が含まれることなしに、種全体に属することが何も欠けていないことになる。<sup>28</sup>

以上の理由に基づいて各々が種別化されている天使と、質料に受容されるような形相との個体化の違いについてトマスは同じ箇所ですら説明する。

基体ないし質料においてある形相がこのもの「である基体ないし質料」においてあることを通じて個体化されるのと同様に、「質料から」分離された形相は「自らとは別の」何かにおいてあるよう本性づけられていないことを通じて個体化される。というのも、このものにおいてあること (*esse in hoc*) がそうであるのと同様に、「自らとは別の」何かにおいてありえないこと (*non posse esse in aliquo*) も普遍——それは多数のものについて述定される——の共通性を除外するからである。したがって、この白さが、白さであるということ——それは種の根拠に属する——に基づいてではなくて、このものにおいてあるということ——それは個体の根拠に属する——に基づいて多数の個体を自らの下に持つことを妨げられるのと同様に、この天使の本性は、諸事物のしかじかの秩序における本性であるということ——それは種の根拠に属する——に基づいてではなくて、「自らとは別の」何らかの基体に受容されるよう本性づけられていないということ——それは個体の根拠に属する——に基づいて

多数のものにおいてあることが妨げられる。<sup>30)</sup>

後半で用いられている白の附帯性と天使の本性を例にとるなら、まず白の附帯形相そのものは、白さであることの根拠としては自らの内に個体であることの根拠を持たない。白がこの白となるためには、個的な基体に受容される必要がある。他方で質料から分離された天使の実体形相は、天使であることの根拠としては自らの内に個体であることの根拠を持たない。しかしながらその同じ形相は、自分とは別の何らかの基体にも受容されえないという否定性を持つということに基づいて個体化されている。このようにして、トマスの場合には形相の種類に応じて個体化のあり方が多様化されている。さらに言うなら、個体化の原理も或る形相にとっては基体ないし質料であるのに対して、或る形相にとつては形相そのものであると行うことができる。

ここでトマスとボナヴェントゥラの違いを述べるなら、天使の個体化に関する限り、トマスは個体化されるものが形相であることをしばしば明示するのに対して、ボナヴェントゥラは質料と形相という二原理が互いを固有化した結果として個体化が生じるとしか言わない。さらには、ボナヴェントゥラにおいては、「この何か」として複合された個体に対してしか真には個体化という概念を適用できないと解釈する余地

さえある。

それに対してトマスは、質料が個体化の原理である場合においても、個体化されるものが形相であることをしばしば明示する。次の引用文は、附帯性である量が質料的事物の区別にどう関わるのかを説明する文脈で、質料的事物の形相がどのように個体化されるのかをトマスが述べた箇所である。

さて、いかなる形相も、それがそのようなものである限りにおいては、それ自体そのものに基づいてこの形相であるのではない。「中略」それゆえ、形相は、質料に受容されることを通じてこの形相になる。しかるに、質料はそれ自体では区別されていないのだから、質料が区別されうるものであるということに即してでなければ、質料が受容された形相を個体化するということはありえない。というのも形相は、「他のものと」区別されること今に限定されたこの質料において受容されるのでない限り、質料に受容されることを通じて個体化されないからである。<sup>(31)</sup>

形相がそれ単独では個的なものではないということが前提されている。他方で、質料もそれ自体では未規定であるがゆえに、形相を個体化するためには自らも個的な質料になるので

なければならぬが、その場合の質料に対しては「区別」や「限定」といった言葉が使われている。ここでもやはり、主要な意味で個体化される対象はあくまで形相である。

さらに言えば、トマスにおいては「存在」や「本質」といったものも個体化の対象として明示されることがある。例えば、初期著作の『存在するものと本質について』では、人間の魂の個体化について語られる際に「個体化された存在」(esse individuum) がどのようにして保持されるのかが述べられている。<sup>(32)</sup> さらに、『神学提要』では、「神の本質は自分自身を通じて個体化される」(essentia divina per se ipsam individuat) と述べられている。<sup>(33)</sup> いずれにしてもトマスが、事物の形而上学的な構成要素の内の主要なもの(すなわち形相、本質、存在) に対して個体化という概念を使っていることとまとめることができる。

#### 四 神の個体化

ここまで天使の個体化に注目する中で、トマスでは主として形相に対して個体化という概念が適用されるのに対して、ポナヴェントウラの場合は、質料と形相が複合されて形成された個体に対してより真に個体化が見出されていることを示してきた。



最後に、別の論点によってこれまでの論述を補足すること  
にしよう。それは神の個体化をどのように捉えるのかという  
論点である。ローラン・ゴスランが指摘するように、神の個  
体化がスコラ学者たちの間で語られるようになったのはオー  
ヴェルニユのギヨームによってであり、そこでは『原因論』  
の一節が或る種のトポスとなっている<sup>35</sup>。第二節で取りあげた  
トマスの『命題集』註解においても、付加されるあらゆる  
可能性の否定によって神の存在が自身に固有なものである  
ことの典拠として『原因論』の同じ箇所が引用されている<sup>36</sup>。  
トマスも『原因論』註解において、まさに同じ箇所に対  
する註解を行う中で神の個体化について言及している<sup>37</sup>。  
さらには、『神学大全』でもトマスは次のようなことを述  
べている。

質料に受容されるものではなくて、自体的に自存する  
ものであるような形相は、他のものに受容されえないと  
いうまさにそのことに基づいて個体化される。そして神  
はこのような形相である<sup>38</sup>。

ここでも個体化されるものが形相であることが明示されてい  
るが、何より興味深いのは、神を形相であると見なすことが  
できる限りにおいて、トマスの個体化論は神をも対象にする

ことができるということである。ただし、仮に神において個  
体化の原理が何であるかを考えるにしても、ただ形相を個体  
化の原理として措定するだけでは正確な定式化とは言えない。  
それゆえ、『原因論』註解の第九講に基づくとなら、まず神  
に対しては「自存する存在そのもの」(ipsum esse  
subsistens)を、他方で天使に対しては「存在とは別の、自  
身を通じて自存する形相」をそれぞれのより固有な個体化の  
原理として措定することが可能である<sup>39</sup>。ここでは、事物の形  
而上学的な構成要素のどれか一つによって定式化が可能であ  
るといえることがあくまで重要である。

神と被造物を含めた「ユニヴァーサル」な理論としてトマ  
スの個体化論を捉えることが可能であることは、個体化され  
る対象が形相や存在といった全事物に見出される形而上学的  
構成要素であるという存在論的前提と表裏一体である。無論、  
神と被造物とで具体的に措定される個体化の原理が異なるは  
ずであることから窺えるように、ここでのユニヴァーサル  
性は神と被造物を同次元に並列することを意味しない。さら  
には、被造物の間でも天使と質料的事物では、個体化が種別  
化としても捉えられるのか、それともそうでないのかという  
違いもあった。それでもトマスが、質料的事物のみならず天  
使や神についても個体化という概念を適用し、しかもより厳  
密な意味での個体化の対象が形而上学的構成要素のどれか一

つであるとしていることを等閑に付すべきではないだろう。それゆえ、神と被造物の間にある違い、さらには被造物の様々な種類の間にある違いを前提としながらも、個体化論という理論的な枠組みを設定できる限りにおいて、ここでは「ユニヴァーサル」という名称を用いることができる。

それに対してボナヴェントゥラの場合は、個体化によって生じる個体があくまで質料と形相から複合されたものとして想定されている以上、そのような意味での個体化の対象として神を想定することはできない。ボナヴェントゥラもまた、神は質料との複合を含まない単純なものだと考えているからである。ただし、神に対して個体化という概念自体を使うことはボナヴェントゥラにもある。例えば、『命題集』註解<sup>④</sup>でポエティウスに由来する「理性的本性の個の実体」というペルソナの定義の妥当性を議論する中にそれが見出される。まず被造物においては、種的に完成している状態を表す種別化 (specificatio) と、そのような完成が縮減されている状態を表す個体化が見出される。しかし神においては「個体化ないし区別は単なる起源 (origo) を通じたものである」と言われる<sup>⑤</sup>。ここでは、一なる神において三つのペルソナが区別されるという意味で、個体化という概念が実質的にはペルソナに対して言われていると理解できる。それゆえ、ボナヴェントゥラの個体化論が神を扱うことができないと断言するこ

とは正しくない。しかしながら、トマスが一なる神に関して語っていたような個体化論はやはりボナヴェントゥラには見出されないと評価することはできる。またこのことは、三つのペルソナに関してはボナヴェントゥラが被造物と同じような複合を認めていることを含意するわけでもない。結局のところボナヴェントゥラにおいては、神の個体化に関する考えを見出すことがトマスよりも困難であるため、ボナヴェントゥラによる個体化論は被造物に特化しているという意味で「ローカル」な理論であるという側面が強い。一つだけ確かなのは、ボナヴェントゥラが個体化という概念をペルソナの区別の基礎に据えていることである。さらにボナヴェントゥラが個体化の対象として主に個体そのもののことを念頭に置いていることを踏まえるなら、彼には何かが個体化されるということをそもそも説明する必要はない。このように考えれば、彼の探求の関心はむしろ、何かが個体化されることに向いていたのではなくて、「この何か」であれ個の実体であれ、個体としてあるものの個性性に最初から向いていたと評価することができる<sup>⑥</sup>。

## 五 今後の展望

このようにして、個体化の原理という概念をめぐるスコラ

学者たちの言説の中から、個体化ということそのものに関する存在論的前提に注目することは、個体化の原理をめぐる哲学史を見通すにあたり一つの有用な視点であると思われる。少なくともこの視点は、個体化の原理の候補として知られる指定された質料 (*materia signata*)<sup>4</sup>、このものの性 (*haecceitas*)、存在性 (*entitas*) とごった概念にのみ拘泥してしまふ危険性をいくらか排除してくれる。個体化の原理は、個体化の対象となる事物そのものがどのように捉えられているのかということと密接に関係している。それと同時に、あるいはその結果として、個体化ということそのものの理解を得ることができるようになる。それゆえ、個体化の原理をめぐる哲学史研究は、中世のスコラ学者たちがおそらくは予期しなかった仕方、個体という概念そのものの探究に寄与することになる。

注

- (1) トマス・アクィナス『神学大全』第一部第三問題第二項第三異論。トマスの原典は基本的にレオ版を使用した。ただし『命題集』註解』はマンダネ・モース版を使用し、『原因論』註解』はサフレ版 (Saffrey, H. D., *Super Librum de Causis Expositio*, 2 ed., Paris: Librairie philosophique J. Vrin, 2002) を使用した。
- (2) ホナヴェントゥラ『命題集』註解』第二卷第三区分第一節第二項第三問題第四一六異論解答。ホナヴェントゥラの原典はクアラ
- (3) ッキ版を使用した。またクアラッキ版で原文がイタリックになっている箇所は特に訳出等には反映させなかった。
- (4) King, P., "Bonaventure (b. ca. 1216; d. 1274).", in *Individuation in Scholasticism: The Later Middle Ages and the Counter-Reformation, 1150-1650*, ed. J. J. E. Gracia, 141-72, Albany: State University of New York Press, 1994; 坂口タミ「天使とホナヴェントゥラ——ヨーロッパ十三世紀の思想劇」岩波書店、二〇〇九年、一三五—六三、一九〇—二一七頁。
- (5) トマス『命題集』註解』第二卷第三区分第一問題第一項：『対異教徒大全』第二卷第五〇—五一章：『定期討論集 霊的被造物について』第一項：『神学大全』第一部第五〇問題第二項。山田晶「トマス・アクィナスにおける個物の問題」『中世思想研究』第二八号、一九八六年、二五頁；坂口「天使とホナヴェントゥラ」、一九九頁；石田隆太「*Individuatio*」や「*principium individuationis*」の多様性——トマス・アクィナスによる個の思想の「側面」『哲學』(日本哲学会) 第六七号、二〇一六年、一五九—一六四頁。
- (6) Wippel, J., "Metaphysical Composition of Angels in Bonaventure, Aquinas, and Godfrey of Fontaines.", in *A Companion to Angels in Medieval Philosophy*, ed. T. Hoffmann, 45-53, Leiden-Boston: Brill, 2012.
- (7) Owens, J., "Thomas Aquinas (b. ca. 1225; d. 1274).", in *Individuation in Scholasticism*, ed. Gracia, 1994, 173; King "Bonaventure", 141.
- (8) トマス『命題集』註解』第二卷第三区分第一問題第四項：『対異教徒大全』第二卷第九三章：『霊的被造物について』第八項：『神学大全』第一部第五〇問題第四項。
- (9)

- (10) ボナヴェントゥラ『命題集』註解第二巻第三区分第一節第二項第一問題：第九区分第一項第一問題。
- (11) Pini, G., "The Individuation of Angels from Bonaventure to Duns Scotus," in *A Companion to Angels in Medieval Philosophy*, 79-115.
- (12) 坂口『天使とボナヴェントゥラ』二三五-六三、一九〇-二七頁。ペトルス・ロンバルドゥス『命題集』第二巻第三区分第一章 (*Sententiae in IV Librii Distinctae*, 3 ed., t. 1, p. 2, Roma: Ediciones Collegii S. Bonaventurae, 1971, 341-42)。\**discretio*』には「区別」として訳語を当したが、本稿では「*distinctio*」(ひいては動詞「*distingere*」)に由来するもの(すく)にも「区別」という訳語を当て、両者の意味を基本的に同一視することにする。サン・ヴィクトルのリカルドゥス『三位一体論』第四巻第一四章、第一章。
- (15) ペルソナについて語る際に「個的」(*individuus*)という語の言い換えとして「共通化不可能」(*incommunicabilis*)という語が使用される背景には、「三位一体論」第四巻第二二章におけるリカルドゥスによるペルソナの定義が念頭に置かれていると思われる。詳しくは次を見よ：小倉貞秀『ペルソナ概念の歴史的形成——古代よりカント以前まで』以文社、二〇一〇年、四八-六一頁。
- (16) トマス『命題集』註解第二巻第三区分第二項主文。
- (17) ボナヴェントゥラ『命題集』註解第二巻第三区分第一部第二項第一問題主文。
- (18) 同第二問題主文。
- (19) 同第三問題。
- (20) 同主文 (QR II 109b)。
- (21) 同主文 (109b-110a)。
- (22) 質料と形相という二つの原理に加えて、ピージは質料と形相の両者を現実的に結合させるものを個体化の第三の原理として解釈

- する立場を提示している：Bigi, V. C., *Studi sul pensiero di san Bonaventura*, Assisi: Edizioni Porziuncola, 1988, 82-102。ただしボナヴェントゥラ自身は「二つの原理」としか述べているが、ここで鑑みて「二つ」ではピージの解釈を採用しないことにする。
- (23) ボナヴェントゥラ『命題集』註解第二巻第三区分第一節第一項第二問題主文 (QR II 97b)。なお引用文中の「」は引用者による補いであり、以下も同様である。
- (24) 坂口『天使とボナヴェントゥラ』一四七-四八頁。
- (25) 具体的には「存在」を本質 (*essentia*) の「*quod est*」で解する立場があるのに対して、キング (King, "Bonaventure," 147-48) のようにあくまで形相が所有している現実性のことだと解する立場がある。前者の立場をとるものは次の通り：Klibertanz, G. P., "Esse and Existere in St. Bonaventura," *Medieval Studies* 8 (1946) : 169-88; 長倉久子「ボナヴェントゥラの存在論に関する若干の考察」『カトリック研究』(上智大学神学会会) 第三二号、一九七七年、三四六-六〇頁。坂口『天使とボナヴェントゥラ』一四六-四七頁。
- (26) 「存在の現実態」はとりわけトマス研究においてよく取り扱われる表現ではあるが、ここからもわかる通り、この表現自体は決してトマスだけのものではない。かといって、当時のスコラ学者たちが全く同じ意味でこの表現を使っているわけでもない。詳しくは次を見よ：上枝美典「トマス・アクィナスの存在論研究——「エッセの現実態」としてのエッセ」『福岡大学人文論叢』第三〇巻第一号、一九九八年、三六頁註二一。
- (27) トマス『命題集』註解第二巻第三区分第一問題第四項。
- (28) Suarez-Nani, T., *Les anges et la philosophie: Subjectivité et fonction cosmologique des substances séparées à la fin du XIII<sup>e</sup> siècle*, Paris: Librairie philosophique J. Vrin, 2002, 39。
- (29) トマス『霊的被造物について』第八項主文。

- (30) トマス『靈的被造物について』第八項第四異論解答 (Leon. XXIV.2, 83, 350-65)。
- (31) トマス『ボエティウス「三位一体論」註解』第四問題第二項主文 (Leon. L, 125, 194-208)。
- (32) ただジョーニ (Pini, "The Individuation of Angels," 89n25) も強調するやうに「この言は質料的事物の形相にのみ当つてはまる」ことである。
- (33) トマス『存在するものと本質について』第五章。
- (34) トマス『神学提要』第一部第五章。
- (35) Roland-Gosselin, M.-D., *Le "De ente et essentia" de s. Thomas d' Aquin*, 2 ed., Paris: Librairie philosophique J. Vrin, 1948, 72-73. 関係する『原因論』の箇所は次の通り、第八(九)命題 (Patrin, A., "Le Liber de Causis: Edition établie à l'aide de 90 manuscrits avec introduction et notes," *Tijdschrift voor Filosofie* 28 (1966) : 158, 5)。
- (36) トマス『命題集』註解』第二卷第三区分第一問題第二項主文。
- (37) トマス『原因論』註解』第九講。
- (38) トマス『神学大全』第一部第三問題第二項第三異論解答 (Leon. V, 38b)。
- (39) 石田『Individuatio』と『Principium Individuationis』の多様性』一五九-一六五頁：「トマス・アクィナスと天使の個体化——個体化の原理の射程をめぐる」『中世思想研究』第五九号、二〇一七年、四二-四四頁。
- (40) スコトゥスの個体化論を論じてる中で、ヌーン (Noone, T. B., "Individuation in Scotus," *American Catholic Philosophical Quarterly* 69.4 (1995) : 540) は同一の原理(具体的には「存在」)があらゆる事物に適用されるところ意味で「グローバル」という言葉を個体化論の分析に使っている。しかしここでは、形相であれ存在であれ、神をも含めたあらゆる事物を射程とする存在論の

- (41) 性格を「ユニヴァーサル」と表現することにした。
- (42) ボナヴェントゥラ『命題集』註解』第一卷第八区分。
- (43) この表現自体はキングの研究 (King, "Bonaventure," 171n38) から借用した。ただしキング自身の場合は「ローカル」ということで個体化の近接原因が意味されるが、ここでは理論の対象領域に関する用語として用いている。
- (44) このような評価は、特に坂口が「個の尊重」という表現によって表現しようとしていることと重なるだろう。坂口『天使とボナヴェントゥラ』一四二-一四八頁。より専門的には、「ここまで「個体化」と訳してきた『Individuatio』という言葉そのものを「個性」ないし「実体性」を意味する言葉として解する余地が出てくる。」の点については次を参照せよ：Binotto, F., "Bonaventura e il principio d' individuazione: Una possibile interpretazione," *Rivista di filosofia neo-scolastica* 109.4 (2017) : 835-47.

※本稿は、JSPS科研費一七J〇〇一三六および一八K二二一九一の助成を受けたものである。

(いしだ・りゅうた)

日本学術振興会特別研究員PD／慶應義塾大学文学部)